



夜空の灯台に誘われて





夜空  
の  
灯台  
に誘  
われて

鈴響雪冬・雪待終夜

装幀 鈴響雪冬

## 目次

✿ 繋ぐ	129
✿ 本気の星空	119
✿ 前へ、前へ	99
✿ 磨け、磨け	71
✿ 語る夢	61
✿ 新山 <small>しんやま</small> 高原展望台	37
✿ 偶然あるいは必然	11
✿ あの日誓った空	5

## 主な登場人物

✻ 菊地貴規きくち たかのり

本作の主人公。大学院でまちづくりを勉強しようとしている。ニコン。

✻ 白沢浪輝うすざわなみき

本作の主役。新山高原の星空をもっとアピールしたいと思っている。ニコン。

✻ 佐々木剛ささき たけし

ホテル鳴砂の若旦那。いろいろな風景写真を撮っている。キヤノン。

✻ 千田由弦ちただゆづる

北東北トラベルの社長。花巻を中心にバス事業を展開している。

✻ 小国おぐに

ひょうたん島観光の広報担当。

✻ 佐藤さとう

ホテルカモミーユの社長。観光協会会長。カモミーユ会代表。

あの日誓った空

それは、美しさを通り越して、恐ろしさすら感じる星空だった。

僕らが宇宙から見たら塵芥ちりやがたに過ぎないという事実を叩きつけてくるような、そんな星空だった。

一昨日の地震の時はなんともなかったけど、昼間の地震はあたり一帯に停電をもたらしたようで、いつもは夜空を煌々こうこうと照らしている仙台的街明かりも、今はしんと静まっていた。目を凝らすと南の空から立ち上る天の川がうつすらと見える。オリオン座はかろうじて見つけられた。オリオン座のベテルギウス、おおいぬ座のシリウス、天の川を挟んで反対側のプロキオンが冬の大三角——見分けがつくのはそこまでだった。あと三つで冬のダイヤモンドになるのに、あまりの星の多さにどれがどの星かさっぱり分からない。星座だつてたくさんあるはずなのに、星座とそれ以外の星の見分けがつかない。もちろん、僕自身が知っている星座が少ないのもあるけど、知っていたらもっと別の感情でこの空を見上げていたのだろうか。

これだけの景色を目の当たりにしても、そのほとんどを理解できないこと、星空は毎日変わらずそこにあるはずなのに、今まで気がついていなかったことに後悔してしまうほどだった。

どれほどの時間が経っただろうか。呆然と空を見上げている体が寒さに震えてようやく我に返った。あれほどあった余震も、その美しき天蓋に見惚れていたかのように静かだった。僕が気づいていなかっただけかもしれないけど。

ふと、シャッター音が立て続けに鳴ったのに気がついてあたりを見渡した。いつの間にか近所の人も外に出ていて、スマホを空に向けていた。いつの間にか外に出ていたお隣の高橋さんが「すごいですね」とこぼし、僕もそれに「そうですね」と答える。

「撮れるかな」

そんなことを言いながら高橋さんがスマホを取り出すのを見て僕もスマホを取り出し、そのレンズをオリオン座へ向ける。画面の中は真っ暗で、シャッターボタンを押してもなにも映ってなかった。

「だめかあ」

隣の高橋さんもうやら同じ結果だったらしく、そんな声が聞こえてくる。

「お、凄いな」

「お父さん」

遅れて出てきたお父さんは首からカメラをぶら下げていて、左手には三脚を持っていた。



「最近やっつてなかったけど」

そう言いながら三脚の足を伸ばし、テキパキと設置して、カメラを据え付けた。

「どれどれ」

普段使っているファインダーではなく、背面の液晶を見ながら、「ま、こんなものだろう」といい、カメラから伸びているコードの先についているボタンを押した。しばらく経ってシャッターが切れる音がすると、液晶に星空の写真が浮かび上がった。

「すごい！」

「だろっ？」

「見せてもらってもいいですか？」

「どうぞどうぞ」

お隣の高橋さんも「綺麗に撮れるんですねえ」と感嘆の声を上げていた。

お父さんはその後も何枚か写真を撮り続けていた。そんなお父さんの姿を見たいと思う一方で、僕自身も星空を見たい気持ちを持てきれず、高橋さんと一緒に再び空を見上げた。

この時の僕は気づいていなかった。この日、いや、次の日に新聞が届いて、世間に何が起こったことを知ったその瞬間、

僕の中でいろいろなものが音を立てて変わっていった。それは趣味だったり、将来の夢だったり、人との繋がりの在り方だったり、多分いろいろだ。

〈宮城 震度7 大津波〉

地震の次の日、届くと思っていなかった新聞の一面に白抜きで書かれたその文字は、当時の僕を揺さぶるには十分すぎた。



あれから八回目の三月十一日が近づき、なにかと報道が熱を帯びてくる頃、僕は教授の研究室で一对一の面談を受けていた。

「卒論と卒制、見せてもらったけど、間に合ってよかったな」

「おかげさまでなんとか…」

「院の面接の時からやりたいことの方向性は変わっていないんだけど、まだ具体的に何がやりたいか決まらないのか？」

「改めて自分の思いが漠然としていることに気づかされて、悩んでいる感じです」

「そんな調子で修論のテーマは決まりそうか？ 二年間付き合うんだから、やりたいことをちゃんと探した方がいいぞ」

いい物はできたと思う。だけど、満足はできていなかった。クオリティーの問題ではない。僕の気持ちの問題だ。

やりたいことがあってここまで来たのに、肝心のやりたいことを具現化できない。着手のタイムリミットが迫る中で、ひとまず教授の継続研究を手伝うという形でお茶を濁した。それがこの不満の正体だ。教授もそれをよく理解している。だからこそ、こうして講義がない日にわざわざ時間をとって向き合ってくれるのだろう。

「…いえ、まだです」

「そうか…」

エアコンとパソコンの音が満たすだけの空間に、教授が背もたれに背中を預ける音がギィと突き刺さる。

「そうだなあ…。まちづくりとか復興とか、地域振興とか、そういうことをテーマにしたい、確かそんなだったよな」

「はい」

それは、四年生になって研究室を選ぶときに僕が教授に最初に言った言葉だった。教授の声で繰り返されると、やっぱりテーマが漠然とすぎていることがよく分かる。内陸に暮らしていた僕は直接被害を受けることはなかった。だけど、

温泉街全体で被災者を受け入れるという話になり、そこに国の施策も相まって忙しくなった親戚の旅館を手伝ったりするなかで、僕のやりたいことは少しずつ形作られていった。

だけど、まだ芯がない。

それは八年が経った今でもはつきりしていないのだ。そして、少しでもやりたいことに近づくために入学した大学がそれに拍車をかけた。知識を得ることで世界が急速に広がり、奥行きが生まれ、余計にやりたいことがわからなくなった。『まちづくり』を標榜するこの研究室ですら、都市内農地、市街地活性化、温泉街、離島、農村・漁村、災害・復興・避難計画など大きな分類だけでも多岐にわたっている。

僕は、本当はなにをやりたいんだろうか。

「菊地君がやりたいのは、都市計画の中でも社会学よりの分野だな」

「社会学、ですか」

「そう。都市は建築の集合ということもあって、うちの大学だと工学部建築学に属しているけど、都市は人の生活の器でもあるから、工学部に限らずいろいろな切り口があるんだよ。まあ、だからといってここでできないという事はないから安心しろ」

「は、はい」

「まあ、とりあえず、行ってみるしかないだろうな」

「行ってみる？」

「そう、現地に。そこで現地の空気に触れて、あわよくば人に触れて何か聞いてこい。沿岸に行ったことは？」

「実は、あれからは一度も」

行く理由がなかった、といえは多少は聞こえはいいかもしれない。単に抵抗があるのだ。沿岸に親戚や知り合いがいるわけじゃない僕が興味本位だけで行くことに。先生に正直にそのことを告げると、「まあ、そう言う気持ちも理解はできる」と言いながら天井を見上げた。

「興味本位でもいいと思うんだけどな、俺は。だけどそれが難しいなら、観光気分で行けばいい」

「観光気分って……ますます難しいですよ」

姿勢を戻した教授は、僕の目をじっと見つめてきた。

「そういえば菊池は写真をやってたじゃないか。岩手なんかは奇巖が多くていい写真が撮れると思うぞ」

「本当に観光じゃないですか……」

「岩手の沿岸南部はいわゆるリアス海岸で、すぐそこまで山が迫っているようなところに人が住んでいて、目の前は海だから、景色としてもすごく面白い。どうだ、見たくなってきたか？」

「面白い景色、と聞いて少しだけ心が揺れるのがわかった。

山育ちだから基本は山派という自覚はあるけど、山育ち故に海のことを気になるという自覚もある。それに、山がすぐそこまで迫っているのに目の前が海という光景はあまり想像できなかった。ほとんど崖みたいな光景だろうか。

「何か問題が？ 不謹慎か？ 可哀想か？」

「そ、それは」

「俺からすれば、変に忌避するより、観光してお金を落としたりの方がよっぽど現地のためになると思うけどな。そりゃあ、被災現場を前に自撮りをしてSNSにアップするのは不謹慎だが、現地の料理や景色をアップすることは別に悪いことじゃないだろ。お前ならSNSを使ってもっと人の役に立てるはずだ」

「役に立つ……？」

「そうだ。俺達の研究だってその成果を社会に還元することで地域に貢献するという大義名分があるからこそ続けられるし、金銭的にも支援される。だけどその効果はすぐには出ない。それどころか研究の結論が出るまで何十年もかかるかもしれないし、この施策は駄目だという結論が出ることもある。それに比べたら現地で寝泊まりして飯食った方が遙かに役立つだろう。お前の写真で興味を持つ人が一人でも現地に行っ

たら効果は二倍だ」

先生は一気にそこまでまくし立てると一呼吸おいてさらに続けた。

「これも一つの切り口だと思えばいい。まちづくりというと都市計画だとか交通計画だとか、どうしても堅い話になるが、それだけじゃない。人が住む場所を研究するんだから、現場が一番大事だ。まずは行って見ろ。話はそれからだ」

ほら、そうと決まったらさっさと行動する、とまくし立てられて研究室を追い出された。

「観光、か」

研究でも観光でもいい。やりたいことをやるためには一度は足を運ばないといけないのは確かだった。それならこの夕イミングで行くしかない。教授の言う奇巖はもちろん、純粹に海辺の景色というのは興味がある。仙台でも山の方で育った僕は、あまり海というものを見たことがない。最後に海水浴に行ったのはいつだったろうか。

大学から一駅移動してアパートに着くまでの間に、今まで悩んでいたのが馬鹿馬鹿しく思えてくるほどに僕の気持ちは軽くなっていた。三月十一日が近づくとホテルもとりづらくなると言うし、早速行き先を考えよう、そう思いながら部屋

の鍵を開けた。

偶然あるいは必然